

まえがき

「荷電粒子核反応データファイル」NRDF を作成する事業が始められて 40 年になりました。学術研究成果である核データをデータベース化して、誰でもそのデータを利用できるようにするという目的を設定して、その目的を達成するためにこれまで 40 年を費やしてきたということです。この事業を始められた田中一北大元教授は、しばしば「研究は一つの事業である」と言っておられましたが、核データのデータベース作成は典型的事業活動と言ってよいのではないのでしょうか。また、田中先生は研究の過程を客観的にとらえて「研究過程論」を展開されましたが、JCPRG の 40 年間の活動のプロセスをふりかえることは 1 つの研究過程を検証することにもなるものと期待されます。

原子核反応データベースを作るというのは 1 つの基本的課題でした。この基本的課題に対して、この 40 年間、様々な個別課題が次々と現れ、それらの個別課題の解決に取り組んできたのがこの間の活動だったのではないのでしょうか。その個別課題は、核データベース作成の中で生じてきた問題であり、しかもその時点でどうしても解決しなければならない問題であったことが、この 40 年史を編纂する中で改めて強く認識させられました。

それらの個別課題は多くの人たちによって担われてきました。この 40 年間は多くの人から人へのつながりの一つの区切りです。これまでのつながりを振り返って、この 40 年史がこれからの新たなつながりを生み出していく上で役に立つことになればと思います。これまで核データ活動に関わられた方は優に 100 名を超えています。この度、出来るだけ多くの皆様に書いて頂くように努めました。私たちの力不足ですべての方にお問い合わせすることは出来ませんでした。今後、更に歴史を重ねる中で、また、執筆して頂く機会に待ちたいと思います。

この 40 年史では、NRDF 誕生の当時から今日まで、核データセンターとして取り組んできた諸課題を、多くの方々に書いて頂きました。その中で新しい事実も判明しました。JCPRG (Japan Charged Particle Reaction Data Group) の名称は、当時 IAEA の核データセンターネットワークの重要メンバーだった、BNL の Vicky McLane さんの提案だった、ということもその一つです。その当時われわれのグループは、国際核データセンターネットワークの組織の中で、「センター」ではなく“Study Group”として通して来ていました。しかし、「国際的にも札幌にセンターを」という要望は強かったように思います。2007 年、IAEA のバックアップもあり、ようやくセンターが設立されました。しかし、その後も英語名の略称は JCPRG を使用することになっていました。われわれのグループの歴史性をその名称に残しておきたいという思いが込められているように思います。

この 40 周年史を通して、JCPRG の基本的課題をもう一度噛み治し、ここから新しい個別課題が生まれ展開されて行くことを大いに願って止みません。

「JCPRG40 周年史」編集委員会